

医療の世界で生きる女性たち

WOMAN in MEDICAL

豊川市／小児科医 可知薫さん



「いつも周りの人たちに
育ててもらっています」

「両親の仕事を近くで見えてきたせい
か昔から子どもが好きで」という可
知さんは、母親と同じ小児科医に。

現在勤める可知病院はご主人であ
る院長のこだわりで「病院らしくな
い」をコンセプトに昨年建替えられ
た。小児科スペースも子どもたちが
通いたくなるような楽しい雰囲気。
「もちろん泣き声も聞こえますけど
笑い声も大きいんですよ！」とうれ
しげな表情は単に子ども好きとい
うだけではなく、自身も一男三女の母
であるからにちがいない。

今でこそこやかに語る可知さん
だが、夫婦ともに勤務医だった時代
はまさにてんでこ舞い。ときには病
院から真夜中に呼び出されてベビー
カーを押して出勤し、看護師さんに
子守りを頼む事もあったとか。そん
な大変なときに支えてくれた多くの

人々との出会いには今も感謝の気持
ちを忘れていない。

可知病院がある豊川市に移ってか
らも地域の人たちの優しさに助けら
れ、育てられてきたと話す。そして、
出身地の大阪とは趣のちがう旧東海
道の歴史ある街並みや、由緒ある祭
りなどを通してこの土地が大好きに
なったともいう。

「アイラブ豊川です！」という彼女
は、だからこそ小児科が足りない地
域医療の現状を憂い、また、四児の
母としては、子どもを産み安心して
働ける環境づくりが必要とも考えて
いる。その思いは、市内で唯一の
「病(後)児保育室」の開設というカ
タチになった。

「わたしみたいな働くお母さんを
バックアップしたいんです！」
そう笑顔で力強い口調で。



親御さんとのコミュニケーションも大切にしている。普段の様子を知っているお母さんだからこそ子どものちょっとした変化にも気づき、情報をくれるからだとか。「日々楽しいですよ」という可知さんにとって仕事と子育ての公私はバランス的に良いらしい。患者の子どもたちの笑顔によるこび、わが子四人の笑顔に癒され、それこそがパワーになるという。

文／斎藤重雄 写真／中谷翔